

1988年6月下旬の総会で会長を引受けてから、間もなく半年になろうとしている。

協会の今後の運営方針については、就任時の挨拶及び就任直後の記者会見で明らかにしたところであるが、その内容は、7月14日の電波新聞及び7月25日のゴム化学新聞に詳しいので、電波新聞の記事を再録させてもらう(次頁)。

この考え方のコンセンサスを得る為に、7月に入って会員各社を訪問し始めた。現在、多忙にかまけて半分程度しか消化しきれていないが、この過程で、有志懇談会や拡大理事会を持ち、これらの中から、会の名称をプラスチック・ゴムマグネット工業会から、日本ボンデットマグネット工業協会とし、台東区根岸に活動拠点をもうけた。

財政基盤の弱さから、当分の間は専任事務局員はおけないが、近所にある秘書センター(I B J A P A N)を利用することにより、不在の場合の電話は、転換方式にすることによってこれを補い、又ファクシミリもこのセンターのものを利用して体制をととのえた。

又組織的運営を行うことにより、これをカバーしつつある。即ち、ライン組織として、第一部会[原材料部会(磁粉・高分子・磁性コンパウンドメーカー)]、第二部会[製品部会(ボンデットマグネット製品メーカー)]、第三部会[関連機器・関連業務部会(成形機メーカー・金型メーカー・着磁計測機器メーカー・ユーザー・関連業務会社)]をもうけ、会長スタッフ組織として、業務委員会・技術委員会をもうけて、各部長・各委員長にかなりの権限を委譲した。

又副会長を編集委員長として、会の機関紙第1号を3月下旬に発刊することでスタートした。これには会員各社の広告を公募する。

対外的には、日本合成樹脂技術協会は勿論のこと、日本電子材料工業会、未踏科学技術協会、日本能率協会、高分子学会等との関係を、従来に増して深くしていく。

中でも、日本電子材料工業会の関連では、IEC/TC68国内委員会WG-5の委員として、当協会の技術委員長を登録している。又未踏科学技術協会の関連では、1989年5月16日~19日にわたって京都国際会議場で開催される第10回国際希土類磁石学会に、組織委員として当協会の会長を、実行委員として第2部会長を登録した。そして、当協会としてはブースを確保し、会員各社の希土類系やフェライト系のボンデットマグネットを展示、PRすることで進めている。

出荷統計も引続き集計しつつあり、各部会主催の例会も、新事務所の近くにある貸会議室を利用して引続き活動に入っている。

新年早々には、新事務所披露もかねて、新たに顧問に迎えた金子秀雄教授の記念講演を予定している。

会則のみなおし、会員名簿の整理等徐々に活動範囲はひろげており、今少し落ち着いてくれば、討論会の開催、関連図書の出版等へも手を広げていきたい。

会員各社の積極的な参加を御願する次第である。

(昭和63年12月2日)